

第1章 台湾原住民族及び調査対象地概観

1 台湾原住民族

(1) 原住民族の名称と民族分類

原住民族の名称

台湾原住民族を一括する総称は外来統治者の交代によって変遷してきた。

清国時代は「番」と総称され（その集落が「社」、清国統治下に入った「社」を「熟番」、入らないものを「生番」と区別した。日本統治下では「番」を「蕃」に改めたもののこの区別をそのまま踏襲し、帰順しているか否かでそれぞれ「熟蕃」「生蕃」とした。さらに、「生蕃」を「高砂族」に、「熟蕃」を「平埔蕃」に呼び換えた。「高砂族」という名称は大正12（1923）年の昭和天皇の台湾訪問を機に改称されたものであり¹、公的には昭和10（1935）年から使用された。

第二次世界大戦後、中華民国国民政府（以下、国府という）は「高砂族」の呼び名を廃して「山胞（山地同胞）」に改めた。この名称には、主流社会への融合同化を促すという意味が込められていることは明らかである²。

1980年代の原住民族運動によって、「山胞」に代えて「原住民」、「原住民族」という自称名が主張され、その成果によって1994年に憲法増修条文で「山胞」が「原住民」に改称された。ここにおいて、原住民族がはじめて自称を以って呼ばれることとなった。

今日、かつて「生蕃」とされた原住民は「原住民」として、「平埔蕃」「熟蕃」とされた原住民は「平埔族」として法的に区分されている³。

民族名称の変遷

日本統治時代の人類学的研究により、原住民族の分類・名称はさまざまに定

¹ 理蕃の友、昭和11年4月、p.4.

² 笠原政治（2004）台湾の民主化と先住民族、文化人類学研究、5、p.35.

³ 平地に居住する平埔族は清国時代を通じて漢族に圧倒され民族的特色を失ってきており、総督府は人口統計には「熟蕃」「平埔蕃」のカテゴリーは残したが、法律的には漢民族系住民と同じ扱いがなされた。

義されてきた。明治 33 (1900) 年には伊能嘉能が原住民を 7 分類⁴、明治 43 (1910) 年には鳥居龍蔵が分類法は異なるが 7 分類⁵、そして大正 6 (1917) 年に森丑之助がタイヤル、ブヌン、ツォウ、パイワン、アミ、ヤミの分類をおこない⁶、台湾総督府もこれを採用した。昭和 10 (1935) 年、台北帝国大学土俗人類学研究室によって『高砂族系統所属の研究』が刊行され、ここではアタヤル、サイシヤット、ブヌン、ツォウ、ルカイ、パイワン、パナパナヤン、パングツァハ、ヤミの 9 分類を用いている。戦後、国府も基本的にはこの 9 分類を踏襲しているが、パナパナヤン、パングツァハの 2 族はそれぞれプユマ、アミとしてきている。

2000 年の陳水扁政権発足後に原住民諸族の「独立」の動きが強まり、サオ、クマランが新たに認められた。2004 年 1 月には、これまでタイヤルに含まれていたトルクが独立し 12 族となった。

今日、台湾の人口約 2200 万人の約 98 パーセントは漢民族系⁷が占め、残りの 2 パーセント弱が原住民である (図表 1)。

(2) 原住民族の歴史的概観

台湾原住民の母語はすべてオーストロネシア (南洋、あるいはマラヨ=ポリネシア) 語族に属しており、文化系統の上でも東南アジアの島嶼部やオセアニア地域の諸民族と密接な関係にあることは明らかである。彼らの祖先がいつ頃、どのような経緯で台湾島に渡来したのか定説はないが、遠い過去に複数の何波かの民族移動があり、台湾がいま「原住民」と呼ばれている人々の居住地になったことはまちがいないであろう⁸。

次に台湾の歴史をオランダ時代、清国統治時代、日本統治時代、中華民国統

⁴ 伊能嘉矩. 栗野傳之丞(1900) 台湾蕃人事情、台湾総督府民政部文書課：台北、p.283。

⁵ 鳥居龍蔵(1910) 人類学研究・台湾の原住民(一)序論. 鳥居龍蔵全集、5、1976、朝日新聞社：東京、pp.4-13。

⁶ 森丑之助 (1917) 台湾蕃族志 第 1 卷、臨時台湾旧慣調査会：台北。

⁷ 彼らはもともと 17 世紀から 18 世紀にかけて台湾海峡を挟んだ対岸の福建や広東から移住して来た人々であり、閩南語を母語とする福佬系が全人口の約 75 パーセント、客家語を母語とする客家系が同じく 13 パーセントを数える。これに国府にともなって、戦後渡ってきた外省人が加わる。

⁸ 笠原政治 (1998) 台湾原住民、台湾原住民研究への招待、風響社：東京、p.15-16。

治時代に分けて概略する。

今日の「原住民」が台湾の少数民族集団となったのは、17世紀後半のことであったと推察される。オランダ人が台湾の南部一帯を統治した時代(1624-1661)以降、対岸の中国大陸から大挙して渡ってきた漢民族系の移住民は短期間のうちに人口の上で在来の住民を上回り、西部や南部平地に勢力を築いて行った。

清国統治時代(1684-1895)、西部や北部平地に居住する原住民は清国の統治に編入され、いわゆる漢化の道歩んだ。17世紀後半以降、中国大陸からの漢民族の移住・開拓により、今日の台湾社会の基本的性格—少数先住民をうちに含む漢民族優勢社会—が決定的に形成されることになった⁹。

これに対し、中央山地や東部平野、島嶼部に居住する原住民は外来勢力に服属せず自律性を維持し続けた。前者は「熟番」、後者は「生番」として大別され、今日の原住民族集団の識別の枠組みの残滓となっている。

日本による統治は、明治28(1895)年、日清戦争の結果により締結された下関条約に基づいて、台湾が清国から日本に割譲されたことに始まる。日本は台北に台湾総督府を置き、台湾総督には台湾の行政権のみならず、立法権、そして司法権の三権が付与された。総督府は治安・行政の整備とともに経済基盤の近代化を推し進めた。鉄道、幹線道路の建設、港湾の近代化工事、全島の通信網、海底電線の敷設、無線電信の整備などにより台湾と日本本国とが強力に結合されて行った。

その一方で、日本の台湾占領にあたっては、激しい抵抗に直面した。平地の漢民族居住地域での土着ゲリラ勢力を制圧したのは明治35(1902)年、山地の原住民居住地域「蕃地」に対しては明治43(1910)年から「蕃地討伐五箇年事業」を敢行し、約2,200名の戦死傷者を出しながら昭和初期にようやく台湾全島をコントロール下に置いた。支配の確立につれて、日本の統治機構は台湾総督を頂点として、末端の警察派出所巡査まで、治安と行政の網の目が張り巡らされた。矢内原忠雄は「台湾は典型的な警察政治¹⁰」と評している。

日本統治に対する原住民側からの反撃はその後にも散発的に続き、昭和5

⁹ 若林正文(2001b)台湾：変容し躊躇するアイデンティティ、筑摩書房：東京、p.21。

¹⁰ 若林正文編(2001)矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読、岩波書店：東京、p.281。

(1930)年には霧社事件の悲劇を生んでいる¹¹。

総督府は平地に居住する漢族、「熟蕃」「平埔蕃」は「普通行政区」とする一方で、山地に居住する「生蕃」に対しては、その居住地を「蕃地」として区別した。討伐により「帰順」した「蕃社」に対して警察官吏派出所を置き、「蕃地」は「特別行政区」に指定し、警察官が行政を執行する「理蕃」行政をしいた。ただし、平地に居住するプユマ、アミは漢民族と生活状況がほとんど変わらないとして普通行政区とされた。

この行政区の区別は変形されながらも今日まで引き継がれ、山地原住民、平地原住民と分けられている。

日本統治下の「本島人」(台湾人)に対する教育は明治29(1896)年に国語伝習所が設立され、国語(日本語)を主とする初等教育が施されるようになったことにはじまる。原住民の初等教育機関は行政区によって公学校、教育所の区別はあったが、言語、習慣が異なる原住民に対し画一的な教育が施されたことは、汎原住民アイデンティティの基礎を形つくることにもなった。日本語が当時の若い世代のリンガフランカとなったこと、今日においてもなお日本語世代の原住民間の共通語となっていることがそれを教えている。

第二次世界大戦後、国府は原住民の名称を「高山族」、「山地同胞」に改めた。日本統治時代の教育に代って、今度は中国語による同化教育が徹底しておこなわれた。日本の教育を受けた世代と中国の教育を受けた若い世代との間には大きな意識の断絶が生まれ、それがどの民族でも伝統文化の継承を著しく困難にさせた。その傾向に拍車をかけたのがキリスト教の受容であった¹²。

原住民をめぐる社会状況はここ20年ほどの間に急激な移り変わりをみせてきた。1984年に「台湾原住民権利促進会」が結成されたことが一つの契機であった。原住民運動が登場した1980年代以降の台湾では、国府の強権政治が激しく揺さぶられ、民主化要求の大きなうねりが起きつつあった。特に戦後38年間続いた戒厳令が1987年に解除され、それまでの重苦しい言論統制や反国民党勢力に対する政治弾圧が消滅していったこともそれを後押しした。

¹¹ 詳しくは第3章を参照のこと。

¹² 笠原(1998) p.19。

2 プユマ及び知本

(1) プユマ

概要

プユマ（卑南族, Puyuma）は、台湾東南部の台東市および卑南郷に10集落を構えて居住し、現在人口約9,500¹³を数える。台東平原一帯の南北約20キロメートルという狭い分布でありながら、語彙をはじめ集落間の文化的偏差は少ない。

プユマは原住民の中でも平地での居住歴が長く、平埔族¹⁴とされてきた諸民族を除けば漢民族との接触がもっとも豊かでその影響も大きい。いわゆる漢化が進行し、伝統的諸習慣は著しく衰退あるいは変容している¹⁵。

プユマの神話上の発祥地は太麻里郷三和の海岸部に位置する「ルブアーン」（陸發安）であるが、研究者によって発祥神話の相違から二分されてきた。始祖がルブアーンの竹から誕生したとされる卑南系と、石から生まれたとされる知本系である。

プユマは他の台湾原住民諸族と同様に、民族集団全体を指す自称を持たず、諸集落のなかでもっとも優勢とされる¹⁶プユマ集落（南王、日本統治期・卑南社）の名をもって、「プユマ」、「Puyuma」、あるいは「卑南族」と呼ばれる¹⁷。決して、プユマ集落が文化的に民族集団全体を代表するものではないが、この名称故に一集落名と民族集団名が混在することとなった。これによって、一般的にプユマと言えば南王集落を指し、南王の文化がプユマ文化を代表するかの如く表象されている。

プユマはこれまで研究者側によって民族集団の分類や名称がさまざまになされてきた。物質文化や社会構造などの一面で隣接のパイワンやルカイとの文化

¹³ 2004年6月30日現在。行政院原住民族委員会ウェブサイトによる。

¹⁴ 台湾島の平地に住み漢化が進んだ原住民。

¹⁵ 蛸島直（2005）プユマ、講座世界の先住民族 01 東アジア、明石書店：東京、p.140。

¹⁶ これに関する知本の語りは次のとおり。「漢民族が来た時、台東から近い向こう（卑南）に先に行ってしまった（から先に知られるようになった）」、「トウモクの息子が卑南に遊びに行行って戻ってこなかった。そのまま養子になり、それから貢ぎ物を持ってこなくなった（地位の逆転）」。

¹⁷ 漢語では「普優瑪」、「普悠瑪」などの表記もみられる。

的な近似を指摘することができ、かつては「パイワンの一部」とみなされたこともあった。昭和10（1935）年刊行の『高砂族系統所属の研究』では、彼らの発祥神話からパナパナヤン¹⁸の名称が提示されたが定着しなかった。

かつては、8集落があったところから「八社蕃」と呼ばれたこともあった。この呼称は知本の日本語世代では頻繁に使われ、日本語による民族集団名ではあるが、一集落名に基づくプユマ、卑南族よりも好まれていると思われる。

プユマ社会

伝統的なプユマ社会は、首長制と厳格な年齢階梯制によって特徴付けられ、男子集会所が政治や軍事、また集落祭祀の拠点となっていた。そこでは青年男子が寝起きを共にし、その内外では男らしさや、年長者への絶対服従と奉仕が求められていた¹⁹。

また、軍事力と並んで呪術宗教的世界も発達させていた。呪術宗教的事象はパリシあるいはパラリシアンと総称されるが、集落祭祀、狩猟、戦争に関するパリシはラハンと呼ばれる男性司祭が掌握し、医療や葬儀、農耕に関するパリシはトゥマラマオと呼ばれる女性シャーマンが執り行っていた。前者が衰退しつつあるのに対し、後者は現在でも盛んである²⁰。なお、知本では女性シャーマンはプリガウと呼ばれる。

歴史的概観

プユマの歴史のなかでも、本研究と関わってくる漢民族及び日本人との接触の様子を簡単に述べる。

漢民族の台湾への移民が本格化するのは17世紀からである。1684年には清国による台湾支配が開始されるが、漢民族の主たる移住先は台湾西部の平原地帯であり、中央山脈に遮られることで東部への移住、特に台東付近は遅れていた。

¹⁸ パナパナヤンとは筆者の調査によれば「矢（パナ）が落ちたところ」の意である。発祥地が土地狭隘となったため、他へ移住する際にトウモクが山の上から決別の意をこめて放った矢が落ちた先と伝えられる。

¹⁹ 蛸島直（1998）プユマ（卑南族）、台湾原住民研究への招待、日本順益台湾原住民研究会編、風響社：東京、p.104。

²⁰ 同上。

明治7（1874）年、日本の台湾出兵を契機に清国は開山撫番政策に転じ、多くの漢民族が台東に移住してきた。明治28（1895）年に台湾は日本に割譲され、半世紀にわたる日本統治となった。ここで確認しておきたいのは、日本との接触以前、少なくとも約20年間は漢民族との接触があり、これによっていわゆる漢化がなされていたことである。これは彼らの伝統的衣装のなかにその痕跡を認めることができることから、漢文化の影響が少なからずうかがえる。

明治29（1896）年、台東付近の知本社以下44社は帰順し、「熟蕃」となった。台東庁下における理蕃対象はパイワン、ブヌン、ヤミの3族であり、アミ及びパイワンの一部は普通行政区域内平地高砂族に区分された²¹。ここでいう、「パイワンの一部」はプユマのことを指しており、プユマは「高砂族」とされながらも居住地は普通行政区とされていた。

台湾人に対する教育は明治29（1896）年に国語伝習所が設立され、国語（日本語）を主とする初等教育が施されたことにはじまる。台東庁下では翌30（1897）年に台東に国語伝習所を開設、卑南などに分教場が置かれ、明治34（1901）年には知本にも分教場が設けられた²²。明治31（1898）年には知本公学校と改められ本科4年の課程が置かれていた²³。原住民を対象とした公学校としては極めて早い時期の設置といえる。これによって厳格とも言うべき日本語教育が推進されて行った。

日本統治時代、原住民集落内に漢民族が居住することは制限されており、知本ではわずか2戸ばかりであったが、第二次世界大戦後、日本人が引き上げるのと同時に多数の漢民族が移住し、混住が進んだ²⁴。

知本では漢民族を指す「パイラン²⁵」という言葉がある。「パイはうそをつく、ランは人。うそをつく人」として説明される。また、彼らを形容して知本日本語で「手が長い」、「ポケットの大きな服」という表現もある。前者は盗む仕草を、後者は贈賄の横行を指すものと思われる。こうした言葉や表現が用いられ

²¹ 台東庁（1931）台東庁要覧、p.42。

²² 台東庁、前掲書、pp.51-52。

²³ 台東庁庶務課（1925）台東庁教育要覧、p.12。

²⁴ 語りによれば今日、知本プユマの人口と土地所有の割合は「知本の原住民は三分の一程度、土地は十分の一程度」であるという。

²⁵ 「悪人」を意味する閩南語の *pailang* に基づく（蛸島、2005、p.143）。

る背景には、彼らとの間で少なからぬ摩擦があったことを如実に物語っているといえよう。日本語世代の日常会話のなかにも頻出し、区別意識が顕著なことが伺える。

しかしながら、一方では漢民族との通婚の増加、国語（北京語）による画一的な学校教育と相まって漢文化の影響は加速化している。

生業形態

プユマの生業形態は、粟、サツマイモ、タロイモを中心とした農耕にワナによる狩猟がともなうものであった。漢民族との接触により、比較的早くから水稲作も導入されてきた。日本統治下では製糖産業による甘藷栽培が盛んであったが、第二次世界大戦後の砂糖の輸入自由化により衰退の一途をたどった。今日では果実栽培が主となっている。

戦後、農業離れが深刻となった。それまでは自給自足の生活であったところに、貨幣経済が浸透したこと、または漢民族との関係において土地を手放さざるを得なかった者も少なくなかった。職を求めて得て遠洋漁業、台北や西部の諸都市に出る者が急増した。

近年、台東近辺でも現金収入が得られる第二次産業が増えてきたが、1990年代の後半から台湾全土を覆う不景気により失業者は多い。

今日の台湾社会を特徴づけている物の一つに檳榔がある。嗜好品として檳榔子とカズラ（キンマ）の葉に包んだ石灰を噛む習慣は原住民のみならず、漢民族の間にも普及している。台東地方はこのキンマの葉の特産地であり、葉の栽培とその選別が貴重な現金収入となっている。

(2) 知本

調査地の知本（日本統治期・知本社）は台東市から南西約11キロメートルの幹線道路沿いに位置し、台東市知本里、建業里、建興里の行政区画から成る。生活関連のインフラは整備されており、住環境の面では漢民族集落とほとんど変わらないといえよう。人口は2000年の戸政調査によれば3,265人、そのうち原住民は約30パーセントの970人である。しかし、この割合は必ずしも現状を

反映してはいない。通婚により「族群²⁶」構成が複雑になっていること、また、登録が父系主義によるものであることから、実際には自らのアイデンティティを原住民とする人々はこれより多い²⁷。農畜産業以外の就業選択肢は少なく、隣接の台湾を代表する保養地となった知本温泉や台東市内の観光関連の仕事に従事することが一種のステータスとさえなっている。

知本はカティプル語で「カティプル²⁸」(Katatipul)、略して「ティプル」とも呼ばれ、日本統治時代には「知本」の字を当て「チモト」とも読まれていた²⁹。今日、プユマは「チポン」、漢民族は「チーペン」と呼ぶ³⁰。近年、知本において特に「伝統」を意識した場合にはカティプルの漢語表記「卡地布」が使われることもある。

伝統的なプユマ社会の特徴として、首長制と年齢階梯制及び男子集会所があげられる。首長は清国統治時代から日本統治時代の頭目制の名残で「トウモク」、あるいは北京語の発音で「トウムウ」と呼ばれる。トウモクは「ラハン」(司祭³¹)であるが、必ずしも「アヤワン」(首長)ではない。リーダー的資質に欠ける場合には、別にアヤワンが立てられることもある。トウモクはかつては政治的、呪術的権威を有していたが、今日では集落における文化的統合の象徴となっている。

知本プユマには3つの系統³²(マバリユウ、パカロク、ルバニャオ³³)があり、それぞれトウモクが存在する。知本プユマはこの3つの「カルマアン³⁴」(本家)のいずれかに属している。また、厳格に区分された年齢階梯制(図表3)に基づく「パラクワン」(男子集会所)(写真2)が置かれていた。パラクワンは政治、軍事、集落祭祀の中心地であり、青年たちが寝食を共にし、年長者へ

²⁶ 現在の台湾住民が、原住民、福佬人(閩南人)、客家人、外省人(新住民)の四者から構成されているという意味。

²⁷ 陳建年(2001)台東県史 卑南族篇、台東県政府、p.101。

²⁸ 「卡地布」初出はオランダ統治時代の1642年であるとされる。

²⁹ 「知本は蕃人はジッポンと呼んでいる。ジッポンはニッポンだ。其処で日本をジッポンと結びつけようとして喜んでいる人もあるが、それは俄かには信ぜられない」(小泉、1932、p.178)。「チポンとニッポンは発音が同じだ」とする語りは今日にもある。

³⁰ アルファベット表記は、Chihpen、Jhahben、Jrbenなどさまざまにみられる。

³¹ 漢語表記。

³² 知本日本語で「系統」と表現する。

³³ 漢語では、馬法溜、巴卡露固、路法鳥、と表記される。

³⁴ 祭祀をおこなう小屋の意味もある。

の絶対的服従と徹底した奉仕などの社会規範を教える場であった。しかし、戦後に禁止、解散させられている。この経緯については第5章で触れる。

トウモクの説明として「知本の天皇陛下。日本の天皇陛下と同じ。万世一系」との語りがある。

(3) 語り手

ここで、知本プユマの主なインフォーマントの歴史的経験を記述することによって「語り」の文化的背景を明らかにしておく。

陳達治 大正9(1920)年生

長老男子の尊称である「アヌン」、あるいは「増田さん」、「増田のおじさん」と呼ばれる。「増田といえはすぐわかる。陳では通じない」。筆者は「増田さん」と呼ぶ。

ルバニャオの家系に生まれ、ルバニャオのトウモク鳥井氏は「イトコ弟」にあたる。原名³⁵、ソンシン。日本名、増田達治。霊名、パウロ。

知本公学校(4年制)を卒業後、さらに南王公学校(6年制のうちの2年)、台東公学校(2年)で学ぶ。これは父母の強い勧めによるものであった。学校では日本語を使用していたが、学校を離れば「自分たちの言葉」であった。家で日本語を使うと「家では自分の言葉でしゃべれ」と怒られて、「自分たちの言葉」を習ったという。

日本統治時代、知本の「青年会長」、そして知本警察官吏派出所の「書記」として「戸籍係」を2年間務め、出生届の受け付けで「(知本プユマが)名前を付けてくれと持ってきて、部落のほとんどの名前(日本名)をつけた。だから誰が誰だがよく知っている」。同時に知本神社の神主でもあった。

父に「どうしても学校行かなかったらダメ、もっと勉強しろ」と言われ、師範学校を受験するも不合格。「蕃人は20名受けたけど、誰も入れなかった。ワシ等より成績の悪い日本人は皆、8名通ってしまった。そんな馬鹿な事あるかと日本へ渡ってみた。そしたら同じ…、ワシらの方が出来る」。

昭和12(1937)年に知人の医師の紹介で、九州の小倉へ。下宿先の長生寺で

³⁵ 原住民名の漢語表記。知本日本語では一般的に「蕃名」という。

は禅宗の修行を積む。事情により3ヵ月遅れであったため昼間部への進学は断念、止む無く旧制福岡県立小倉工業学校夜間部機械科に入学。「機械が好きだったから、パイロットになろうともそう簡単に出来ないから」。在学中は「甲子園に出場した。センターだった」。しかし、勤労働員により授業も無くなり3年生で退学。「名古屋に本社がある大きな工場」で戦車、砲弾製造に従事する際にも「朝鮮ならダメ、台湾はいいですよ」と台湾出身ということで差別を受けた記憶は無い。むしろ、「若いのに何で戦争に行かないのですか」と問われ答えに窮したこと、また、空襲の被害、衣食の窮乏を目の当たりにし「日本人はかわいそうだった」とむしろ同情を寄せる。

終戦の報を聞き、「一度、故郷を見てみたい。考えれば父も居るし」。すぐに日本に戻ってくるつもりで下宿先の荷物はそのままにして、11月に門司から漁船で台湾、そして知本へ。

「(知本にとどまるのは)嫌だったけど仕方ない。友人(知本プユマ)でも『俺は日本人だから』と日本へ行ってしまった人もおる」。「誰でも日本へ行けた。クラスからも10数名が日本へ行ったが、他は全て帰って来なかった」。戦前、知本から内地に渡り、戻ったのは増田氏ただ一人だけあった。

知人の紹介で台東農会(日本の農協に相当)に職を得るも、周囲が次第に中国化して行く状況のなかで「中国語がわからなかった」、「だんだん言葉が通じなくなり」身を引いた。天主教(カトリック)の伝教員となり約10年間、知本をはじめパイワンの各集落で布教活動をおこなう。その後、台北の高層建築の現場で約18年間働く。

知本へ戻り農業に従事するが、体力的な問題もあり、今では「畑は放ってある」。31歳のときに先妻が病死、18年前に後妻(2004年調査)が交通事故で亡くなった。家族は一男三女、長男は台北に居住するため、現在は一人暮らし。「(話が)合わない」と近所付き合いは少なく、日本統治時代に助産婦であった女性³⁶

(1929年生まれ)が世間話のため訪問する程度であり、ケーブルテレビのNHK海外向け放送を見て過ごすことが多い。

敬虔なカトリック教徒であり日夜の聖書講読を欠かさないが、突き詰めた信

³⁶ 夫は「(日本統治時代の)小学校の校長だったけど、シナが来たその日に辞めた」。

仰心は「偶像崇拜」への懐疑ともなり、「神は形ではなく心にある」という。また、依頼され取組んでいる知本の伝承神話のテキスト化に関しては、聖書的な解釈から「矛盾があり、つじつまの合わないことは書く気がしない。旧約聖書も調べたが難しい。嘘はいやだ」という。一方、現在の伝統的祭祀には「間違っているけど、言わない。言っても聞かない。もう、言うのをやめた」と諦めの境地にあるものの、「若いのに任せたから」と必ずしも全否定している訳ではない。

何か困ったことがあると、「増田のおじさん」に相談に行くと頼りにする知本プユマは多い。汪先生も「判断に困ったら増田の兄さんの所へ行き、兄さんの判断に従う」と全幅の信頼を寄せる。

陳興福 昭和9（1934年）生

日本語世代からは「トウモク」、「ラハン」、「鳥井（さん）」、若い世代からは頭目の北京語発音である「トウムウ」とも呼ばれる。筆者は「鳥井さん」と呼ぶ。

知本生まれ。原名、タトズン。日本名、鳥井松雄。

日本統治時代の知本国民学校に入学、戦争が続いていたなら「予科練に志願し、米軍機に特攻していた」と回想する。中華民国の知本国民学校の第1回卒業生³⁷。「4年間、金賞を貰って（成績最優秀）、級長だったから、先生から中学に行きなさい」といわれ、「台東中学」へ同級生からはただ一人進学した。白線帽を被った時の誇りと「すぐに（帽子の）つばを特攻隊のように（折り曲げた）」と語る。「日本の学校に入ったのだけど、中国の学校になってしまった」ので十分な勉強が出来ず。卒業後は父から「土地があるから戻って来い」といわれ、農業に従事。知本で有数の農家であり「月を見て種まき」をするなど伝統的な耕法で、牛飼いのため3人を雇っていたほどであった。

知本でも最も早い時期に天主教に入信。「天主教の学校」にて日本語で聖書を学ぶ。53歳の時には台湾の天主教会からの派遣にてバチカンでローマ教皇とも

³⁷（2000）台東県台東市知本国民小学創校百年專輯、台東県台東市知本国民小学、p.216。集合写真には「台東県知本国民学校第1回卒業記念 36.7.7」とあり、西暦1947年7月の卒業と思われる。

謁見する。

40年ほど前、天主教を通じて光復後はじめて知本を訪れた日本人、「大学探検部がやってきて」知本から屏東への山行の世話をす。以降、明治大学、東京農業大学、宇都宮大学の農業研修生、探検部などを自宅に受け入れる。この親交がなかったら「日本語は『はい、いいえ』程度だった」と謙遜する。また、彼らの訪問は知本では非常に好意的に受け止められおり、知本に日本人が訪れていると聞くと真っ先に「ヨシノリは？³⁸」と尋ねる。今日、知本の日本語世代が親日であり、日本語を使いこなす背景には、彼らの存在を抜きには語れない一面がある。

45歳のとき、日本遺族会の一員として知本から4名ではじめて日本へ行く。「父親の弟が師範を出て、(高砂)義勇隊に行行って帰って来なかった」。東京農業大学では「大学生がずらりと整列して」出迎えを受けたことが知本での語り草となっている。「教科書で習った靖国神社、国取り神話」の地を訪れ感動する。

トウモクとなったきっかけは「パラクワンを作って、後はトウモクを立てないといけない(文化の復興とならない)と大学の老師に」言われたことによる。但し、血縁であれば誰しものがトウモクになれる訳ではない。トウモクであった母の夢のなかでお告げがあったという。

カティプル語は「子どもの時から、蕃語を聞いていたから今でも話せる」。「(中国語で書かれた)文を読むとき、はじめに日本語の読み方で、分からなかったら中国の読み方をする」。

妻(汪先生の妹)との間に一女一男。長女は学校教育の教材「卑南語」テキストを執筆。長男は元青年会長。

陳明義 昭和12(1937)生

「ジロ」と呼ばれる。渡邊は「ジロさん」と呼ぶ。

知本生まれ。原名、ジロ。日本語名、川村ジロ。信仰は道教。

知本国民学校卒業後、農業のかたわら温泉でも働く³⁹。設計・施工した露天

³⁸ 彼らのリーダーの名前。大学を卒業後もたびたび知本を訪れ親交を深めていたが、現在は音信不通。

³⁹ 40年ほど前、「温泉に掛かる吊橋で日本人のお父さんとお母さん(旅行者)を負ぶって

風呂は好評を博し、以降の見本となる。現在は雑貨店経営が主、農業が従となっている。

「お母さんが早く亡くなったので、おばあさんに連れられて畑に行き、よく蕃人の話を聞かされて」育ったこともあり、伝統的なことに極めて関心が高い。

父から受け継いだ、「鄭成功以前の蕃刀」、日本統治時代のさまざまな物品や古い生活用具を大切に保管している。「30年前、漢人がやってきて蕃刀売ってくれと。売った人も大勢おるけど、僕は売らなかった」。息子が青年会の会長となった時には、自宅納戸をパラクワンとして開放し、後に文化発展協会によるカルマアン、パラクワンの復元にあたって重要な役割を担った。

妻（マバリユウの前トウモクの娘、弟は現トウモク）との間に一男二女。

今日、原住民運動をおこなっている人々、「原住民」と声高に主張する人々、あるいはそれを利用する人々に対し、違和感を禁じえないでいる。

昔、日本の時には八社蕃だったのが、今は12になっている。みんな原住民になりたがっている。学校の授業料安いから。僕ら台東で高い税金を払っている（山地原住民は税制面で優遇されている）。

（2005年、開局された原住民テレビを見ながら）みんなウソ。なんで国語（北京語）でしゃべるか、年寄りも聞いて解らない。（ロック調で歌い踊る画面を指し）高砂がなんでアメリカの踊りをするか。

みんな、高砂で金儲けしようとする。以前、高砂の歌で台北でもうけたのがある。探し出して、止めさせテープを取り戻した。

汪志遠 昭和8（1933年）生、2005年4月没

「汪老師」（ワン・ラオスー）と呼ばれる。渡邊は「先生」と呼ぶ。

知本生まれ、日本名は知本英雄。原名はヒデオ。

祖父は知本で3代目の日本人警察官、祖母はプリガウであった。日本霊友会員で訪日の機会も多く、また日本人の訪問も度々受けていた。

父は日本統治時代、大地主で「保正⁴⁰」を務める。戦時中、隣村の建和への

渡してあげた」際のお礼に貰った東京五輪百円記念硬貨を大切に作る。

⁴⁰ 保甲制度。総督府は清国の遺制を採用して警察の補助機関とした。甲は10戸、保は10

道路を知本プユマを動員して借金で造る。その間、休耕となっていた田畑は農地改革により「光復後に取りられた」。

「日本の学校出だし、少々中国語が出来た。ほとんど中国語のわかる人がいなかったの、すぐに中国の教員になれた」。約 20 年間、自宅前の知本国民小学の体育教員を務める。自身は陸上競技の選手で「野球を強くしたかったが、ボールにお金がかかると校長に言われ、バレー」指導に打ち込んだ。

退職後、文化発展協会の第2期会長に選出され、必要に迫られカティプル語を学び「2、3年でなんとか話せるようになった」。文化発展協会の事業展開で観光化を描いていたが、その夢半ばで病没。

林徳生 大正12(1923)年生

日本名：宮本隆行。

知本プユマでは増田氏に次ぐ高齢者の一人。太平洋戦争末期、海軍特別志願兵として従軍。「陸軍、義勇隊に行った人は大勢おるけど、海軍は一人だけ」と一目おかれている。南方へ移動中に乗っていた船がバシー海峡で撃沈されたが、九死に一生を得て、そのまま終戦まで釜山で療養生活をおくり、知本へは 1946 年に戻る。天主教に入信し伝教員として布教にあたる。

知本の日本語世代は日常的には「原住民」という自称をほとんど用いることはない。むしろ、「きれいなイメージ」だからとして「日本が付けてくれた」「高砂」を好み、「蕃人」も併用する。彼らのアイデンティティを示唆する次のような会話が合った。

ジロ「ボクは原住民じゃないね。高砂」

増田「ワシは高砂じゃない」

渡邊「えっ」

増田「蕃人だ」

～100 戸で組織する地域的隣保団体。保甲の役割は保安警察事務、道路橋梁の改修、普通行政事務など非常に多岐にわたった。「保正」はさしずめ村長にあたる。

知本は普通行政区であったために、原住民でありながら保甲制度が適用された。

本研究で用いられた聞き取り情報は、そのほとんどを上記の方々に依っている。彼らはそれぞれ、知本の歴史や文化、日本統治時代の記憶、戦後にもたらされた天主教といった、多くの知識と情報を持ち、他の人々や場所とさまざまなつながりを持っている人物であり、それ故に彼らの「語り」は知本において相対的な権威を有しているといえる。

しかし、彼らの語りが日本語世代を代表しているわけではない。ましてや知本社会全体を代表しているわけでもない。だが、彼らの話は知本社会では広く傾聴され、受け入れられていることは確かである。



民族名	1929年	1978年	1997年
1.タイヤル	33,677人	66,000人	91,360人
2.サイシャット	1,282人	3,200人	7,025人
3.ブヌン	18,072人	32,000人	41,150人
4.ツォウ	2,103人	4,800人	7,541人
5.アミ	42,028人	104,000人	146,796人
6.ブユマ	5,236人	5,600人	10,571人
7.ルカイ	5,030人	6,100人	12,304人
8.バイワン	30,748人	53,000人	69,446人
9.ヤミ(タオ)	1,619人	2,600人	4,051人
合計	139,795人	277,300人	390,244人

1929年「蕃社戸口」(台湾総督府)により作成。
 1978年 中央研究院民族学研究所の資料による。
 1997年 行政院原住民族委員会のホームページによる。

図表1 台湾原住民の分布と人口

[日本順益台湾原住民研究会(2002) p.8より引用。一部加筆]



図表 2-1 知本付近の航空写真 [http://maps.google.co.jp/から引用。一部加筆]



図表 2-2 現在の知本集落 概略図 (約 1 km 四方)

卑南族男性年齢層名稱

年齢階級	男性稱呼	年齢
少年層	Takuvakuvan タクバクバヌ	13-----17 歳
	1.ngawangaway ガワガワイ	13-----14 歳
	或 maralakan マラダカヌ	
	2.taripazukan タリパドカヌ	14-----15 歳
年齢層	3.kituvangsar キトバンサル	15-----16 歳
	4.maradavan マラダワヌ	16-----17 歳

青年期	男性稱呼	年齢
青年期	valisen パリスヌ	18-----20 歳
	vangsaran バンサラヌ	21-----40 歳
壯年期	musavasavak モサバサバク	41-----55 歳
老年期	mahizangan マイザガヌ	56 歳以上

図表3 知本の伝統的年齢階梯制（卡地布文化発展協会）



写真2 現在のパラクワン（左）。右は望楼



写真3 多くの書籍等で「プユマの男性」として表象される写真。中央はジロ氏の「おとうさんのおじいさん」〔森丑之助編著(1915)第84版「パイワン族卑南蕃の男子」〕